

西国に落ち延びた平家の一門は、再起をめざしながら安徳天皇とともに北九州各地を転々とします。「清経」の詞章には、福岡県遠賀川河口の「山鹿」、大分県「宇佐」などの地名が出てきます。今回はまず、京都から新幹線で博多に行き、管崎、宇佐、柳ヶ浦と清経の足跡をたどりました。

大分県の宇佐神宮、福岡県の管崎八幡宮、京都府の石清水八幡宮は日本三大八幡宮と言われます。管崎八幡宮はJR鹿児島本線箱崎駅から徒歩8分、福岡市営地下鉄の一番出口を上がるとすぐに参道です。博多湾に向かう大きな参道、石の鳥居と常夜灯、海に向かって建つ赤い鳥居が印象的でした。平家一門も海から参内したのでしょうか。蒙古襲来の折に神風が吹いたという話も有名です。一旦鹿児島本線に乗り込み小倉駅に向かう途中で、遠賀川を渡ります。車窓からは見えませんが、詞章に出てくる「山鹿」は、福岡県遠賀郡芦屋町山鹿として地名が残っています。遠賀川が響灘に流れ込む河口、城山公園に平家一門が一時身をおいた山鹿城跡があるそうです。

JR小倉駅で日豊線に乗り換え、宇佐駅を目指しました。宇佐神宮は全国に約十一万社ある神社のなかでも多い八幡神社四万社の総本宮とされる神社です。ご祭神は応神天皇ですが、八幡神としての神道信仰と、八幡大菩薩としての仏教信仰が習合したものと考えられています。天皇家も先祖の祭祀を行う宗廟として、天皇が例祭などに勅使を派遣し、奉幣を行う勅祭社でもあります。この地にたどり着いた平家一門は宇佐神宮に参籠します。天皇が即位する時、国に大事が起こった時に繰り返して奉幣される天皇家崇敬の対象の社となれば、平家に下された「世の中のうさにはかみもなきものを 何いのるらん 心づくしに」のご神託は、若い清経の心が打ちのめされたことは察するに余りありません。とうとう平家は宇佐神宮にも見放された、という絶望感はいかばかりだったでしょう。清経が入水したとされる柳ヶ浦は宇佐神宮の近く、駅館川（やっかんかわ）に架けられた小松橋のたもとに碑が建てられていました。小松橋の名前は清経の父、平重盛の「小松内府」に因んでつけられたそうです。

平成二十六年 弥生吉日

←博多湾側から管崎宮をのぞむ  
↓管崎八幡宮（福岡県）本殿に続く大通り。はるか奥に本殿がある



←日豊本線ソニック車内  
個性的なレイアウトが旅の楽しさを演出する  
↓八幡神社総本宮宇佐八幡宮（大分県）



↑清経入水の碑 画面左側には周防灘が広がる

↓JR柳ヶ浦駅  
駅館川はタクシーで10分ほどの場所

